

下剋上の文学
佐竹昭広



筑摩書房

佐竹昭広 さたけ あきひろ

1927年東京に生まれる

1952年京都大学文学部国文科を卒業

現在 京都大学文学部助教授



下剋上の文学

©佐竹昭広 1967

昭和42年9月30日 初版第1刷発行

著 者 佐竹昭広

発行者 竹之内静雄

発行所 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8

振替東京 4123 TEL (291) 7651(代)

印刷 中央精版・製本 山晃製本



定価 560 円



天理図書館蔵「小おとこのそうし」絵巻の部分（本文「成りあがり」参照）

目次

怠惰と抵抗——物くさ太郎——

成りあがり——一寸法師と物くさ太郎——

無知と愚鈍——物くさ太郎のゆくえ——

*

弱者の運命——御伽草子と狂言——

勝利の歌——狂言の主従——

嘲笑の呪文——狂言の山伏——

有世の面影——狂言の陰陽師——

162 137 114 90 65 37 5

喜劇への道——狂言の「をかし」——

転落の序章——天正狂言本「こけ松」のばあい——

*

下剋上の文学——民話のクツチャネたち——

あとがき

下剋上の文学

益田勝実氏に

怠惰と抵抗

——物くさ太郎——

一

すべて勤勉な人間は互いに似かよっているが、怠惰な人間はそれぞれに怠惰のおもむきをことにしているものである。

信濃の国つかまの郡あたらしの郷はごったがえしの騒動であつた。国司の命令で、「長夫^{ながぶ}」という長期の夫役を一人、急に都へ派遣しなければならなくなつたからである。村人たちはその人選にゆううつな毎日をついやしていた。こんな貧乏くじをいっただれに押しつけようというのだ。できることならだれにも押しつけたくない。だが、どうしてもだれかにいってもらわねばおさまらない。その日も結論はでなかつた。でるだけの意見はどうにでつくしていた。そのとき、一人の男がふとこんなことをいひだした、「あの物くさ太郎はどうだろう。」

この三年来、あたらしの郷では、物くさ太郎という希代の怠け者をやしなっていた。それは泣く子

もだまる地頭殿のお触れによるものであった——「この物くさ太郎に、毎日三合、飯を二度食はせ、酒を一度飲ますべし。さなからん者は、わが領にはかなふべからず。」どうしてこんなお触れがでるようになったのか、その事情はこうである。

物くさ太郎ひちかす、かれは、竹を四本たて、こもをかけたみすばらしい小屋に、きたない恰好をして、いつもごろりと寝ころんでばかりいた。なにひとつ自分でしようとはしない。食べ物がなければ、四日でも五日でも寝たまま動くけはいさえない。かわいそうにももって、餅をめぐんでくれる人があった。太郎は五つのうちの四つを一度にたいらげた。それで満腹したかれは、残りの一箇を手にとって、あおむけになった胸の上で、はじめてみたり、鼻の油をぬりつけてみたり、なめてみたり、額の上のせてみたり、遊んでいるうちに、おもわずとりはずし、餅はころころと大道の方へころがっていった。起きあがってとりにゆくのはおっくうだ、人が通るまで待ってしようと、手もとにあった竹竿で餅をねらう犬や鳥を追いはらいながら三日という日をすごす。三日たったつぎの日、はじめて人がやってきた。それもただの人ではない。郷の地頭、あたらしの左衛門尉のぶよりである。立派な馬にまたがり、五、六十騎の従者をしたがえたかれは、鷹狩の途中、偶然ここを通りかかった。太郎は、一行をうるんな目つきで迎えながら、起きあがりもせず、やおら鎌首をもちあげ、その餅を拾ってくれと地頭に呼びかけた。もとより地頭は目もくれない。太郎が憤然としていう、「あんまのくさは見たことがない。馬からおりて餅を拾うくらいなんでもないではないか。あれでよくもまあ地頭がつとまるものだ。」相手は地頭である。ふつうならば、どんな目にあわされてもしかたのない

ところである。が、地頭はどうおもったのか、わざわざ馬を止め、かねて聞き知ったこの有名なものくさ男にことばをかけた。

「さておのれはいかやうにして過ぐるぞ。」

「さん候。人の物をくれ候時は何をもたぶる。くれ候はん時は、四、五日も十日ばかりもただむなしく過ぎ候。」

「さてはふびんの次第かな。命助かる支度をせよ。一樹の蔭に宿るとも、一河の流れを汲むことも、他生の縁となり。所こそ多きに、わが所領のうちに生れあふこと、前世の宿縁なり。地をつくりて過ぎよ。」

「持ち候はん。」

「さらば取らせん。」

「ものくさく候ほどに、地もはしからず候。」

「あきなひをして過ぎよ。」

「もとで候はず。」

「取らせん。」

「今さらならはぬこと、知らぬこと、なりがたく候。」

世にも珍妙なやりとりをしているうちに、ものずきな地頭は、太郎の徹底した変人ぶりに、ひょっと一種の好感をいだいてしまったらしい。「さてはかかるくせ者かな。いでさらば助かるやうにせん」

というわけで、みずから無為徒食の保証をかれにあたえる結果となったのである。いつにかわらぬ地頭殿の気まぐれに、村人たちは眉をしかめたけれども、しょせん「あはぬは君の仰せ」である。それからというものの、こんにちまで三年間、村人はこの厄介者を、ともかくもやしないつづけてきたのだった。

あのものくさがなんの役にたつ、村人は太郎を長夫に派遣したらというおもいつきを、まじめにとりあげる気にはなれなかった。しかし、すでに万策はつきている。太郎のほかに暇とからだをもてあましている人間など、村には一人もないのだ。かんがえてみれば、ながいあいだ、無駄めしを食わせておいた男だ、こんなときの役にたてば面倒をみてやったかいもあるし、荷厄介な無用者を村から追いはらってしまうにはまたとない機会でもある。ひとつあれをうまくまるめこんで、都へゆかせるしよう。村の長老が説得にでむいた。助力を乞うたり、いままでの恩をきせたりしてすすめたが、さっぱり応じない。そこで一人の長老が、田舎とちがって、都にはやさしいきれいな女がたくさんいる、そのなかから気に入った女を妻として、おまえも一人前になってきてはどうだ、と知恵をつける、さすがのものくさがにわかになり気になって、そくぎに上洛を希望したという。村人は大よろこびで道中の費用を集め、とうとうかれを旅だたせることになった。「男どんだは江戸へもやれど、女のどんだはどもならん」(石川県河北郡雜謡『日本歌謡集成』卷二「近世篇」)ではないが、こうして室町時代の「どんだ」⁽¹⁾も、まんまと都へやられるはめになったのである。

太郎をおくりだした村人は、あの札つきの怠け者が、都へのぼってどんな長夫をつとめるやら、ど

んな失敗をしでかすやら、想像すればするほどおかしくてたまらなかつただろう。われわれ読者の期待も、もちろんこの一点につながっている。しかし、読者の期待はみごとに肩すかしをくうし、村人は後日かえってきた太郎の晴れ姿を見て肝をつぶす。

かれが発見してから、村にはふたたび静かな日々がもどってきた。なにかもともと通りであつた。もと通りでないのは、京へのぼった物くさ太郎だけであつた。物くさ太郎の内部には、ヘンリー・キルが突然エドワード・ハイドに変身したのとおなじような転換の奇跡がおこっていた。すなわち、京へのぼるや、かれの性格は、俄然、従来のもくさをかなぐりすて、正反対の「まめ」に一変してしまつた。かれは国司の館でひたすら「まめ」にはたらき、「すこしもものくさげなるけしきもな」かつた。「これほどまめなる者あらじ」、これが怠け者物くさ太郎の都で受けた賞讃であつた。

二

「ものくさ」がほんとうにまともになつたのでは、おもしろくもおかしくもない。たぶんそのためであらう、平出鏗二郎は『近古小説解題』に「物草太郎が上京して後は全く別人の如くなりて、少しも物くさからざるは面白からず」と評し、藤岡作太郎は『鎌倉室町時代文学史』に「はじめの方おもしろし、後半は物臭といふ性格を忘れたるが如し」と評している。だが、はたしておもしろいのははじめの方だけで、後半は全然つまらない話でしかないだろうか。おもしろさは、存外「前半と後半との運命の相違の意外な点に存する」（野村八良『室町時代小説論』）ではあるまいか。しばらく物語りに

そつて太郎の行動を追うことにしよう。

三か月の長夫は延長されて七か月におよんだ。怠け者だったからではない。「まめ」で役にたつ男だったからである。国をでたのが春のおわり頃、七か月のつとめがあけ、そろそろ暇をもらう時期がきた。もう十一月であつた。かれは国をたつときに長老からいわれたことばを忘れずにいた。よい妻をめとつて帰国するということである。宿の主人に相談すると、主人はあきれて笑いながら、けつきよく「辻取り」をするよりほかにはあるまいと答えた。「辻取り」とは「男も連れず、輿車にも乗らぬ女房のみめよき、わが目にかかるをとる事」である。

一、辻捕事

右、違犯之者、任_ニ御式目_一、於_レ侍者、百ヶ日可_レ令_ニ籠居_一、雑人者、或剃_ニ除片鬢片髪_一、或可_ニ召籠_一矣（新御成敗状、仁治三年正月一五日）⁽²⁾

世が世なら右の禁制が物をいう。しかし、乱世のいまはちがう。それどころか、「天下の御ゆるしにて有なり」、主人はそうかれに教えた。

月の十八日は観音の縁日である。⁽³⁾毎月この日、清水の観音は老若男女貴賤都鄙の参詣人が袖をつらねる。昔、武蔵坊弁慶が、清水の舞台で長刀を振りかざし、御曹子義経と渡りあつたのも、たしか六月の十八日、縁日の日であつた（『義経記』巻三「弁慶義経に君臣の契約申す事」）。

三月十八日に、ひめぎみたち、きよみつへ参り給はんとありければ、（『ふせや草紙』上）

とゝろきのはしのかたを見やれば、おりふし十八日のことなるに、くはんをんにまいりけかうの

きせんかすをしらす『小おとこ』

ふしみの里に年久しう此清水に月参りせるもの有、時もこそ有、時もこそあれ、正月十八日午の日の事になるに、洛中洛外、貴いやしき、此山に歩をはこび侍しに、『是築物語』上

氣にいった女をえらぶには観音の縁日がいちばん適當だ。物くさ太郎が、さしあたり十一月十八日を期して、清水での「辻取り」を決意した理由はここにあった。のみならず――

のみならず、清水の観世音は、俗に「妻観音」とも呼ばれ（狂言「いもじ」⁽⁴⁾）、祈念する者に妻をさずけたまうありがたい観音であつた。その日、その所をおいて、最良の妻をうる機会があるはずはなかつた。

いよいよ十一月十八日である。清水の社頭についても、かれは狂言の主人公のように、観音のお前にぬかずいて、「なにとぞよい妻を授けて下されい」などとは一言も祈らない⁽⁵⁾。なにしろ、暴力でこのみの女を奪いとうろろというのだ。頼む力はただ自分だけにある。ずばぬけた主体性の持ち主だといわねばならない。

其の日のありさまは、信濃より年をへて着たりける、さゆみのかたびらの、なに色とももんも見えぬに、わら縄、帯にして、物くさ草履の破れたるをはき、呉竹の杖をつき、十一月十八日のことなれば、風はげしく吹きていかにも寒きに、鼻をすすりて、清水の大門に焼け卒都婆のごとく立ちずくみにして、大手をひろげて待つところに、参り下向の人々これを見て、あな恐しや、なにを待ちてかやうにはあるらんとて、みなくよけ道をして通れども、近づく者はさらになし。

あるひは十七、八、二十よりうちの女房、五人十人うち連れ／＼通れども、一目よりほか見ざりける。かやうに立ちたる事、あしたより其の日の暮るるまで、人数幾千万といふ事なし。あれも悪し、これも悪しとためらひゐたるところに――

ついにすばらしい女房があらわれた。年は十七、八、一目見た刹那、かれは直覺する、「ここにおけるの妻がいる。」

ここにこそわが北の方はいできぬれ。あつばれとく近づけかし、いだきつかん、口をも吸はばやと思ひて、手ぐすねをひき、大手をひろげて待ちゐたり。女房これを御覽じて……あな恐しや、あのあたりをばいかにして通るべきぞとて、よけ道をして通りける。物くさ太郎これを見て、あらあさましや、あなたへ行くぞや、手のびにしては叶ふまじと思ひて、大手をひろげてつつと寄り、いづくしげなる笠のうちへ、きたなげなるつらをさし入れて、顔に顔をさしあはせて、「いかにや女房」といひて腰にいだきつきて見上げければ、東西くれはてて、さらに御返事ものたまはず。女房は「大和ことば」でのがれようとするが、太郎の即答はそれをゆるさない。つぎに歌をよみかけてこまらせようともころもみた。「貧の盗みに恋の歌」ということわざがある。いつも貧ではあつたが、盗みなどしたことのない太郎は、ここで恋ゆえについぞよんだこともない歌をよまなければならなくなった。歌は意外にもすらすらと口をついてでた。窮地に追いこまれた女房が、「思ふならとひてもきませ わが宿はからたちばなの紫の門」という謎歌をかけ、ちよつとのすきにかれを振り切つて一目散ににげる。あなたの小路、こなたの辻を「わごぜはいづくへゆくぞ」とばかり追いまわ

したが、とうとう見うしなつてしまふ。太郎はあらためて女の残した謎歌を手がかりに、かの女の住まいをさがし求める。⁽⁶⁾ようやく家をさがしあて、広縁の下にかくれていると、上で女房と下女が先刻の恐怖を語りあっている。猛然とおどりがつて、女房を家のなかへ追ひこむ。女は男の強引さに押しまくられ、また、かれのなみなならぬ和歌・連歌の才能に感じ、「これも前世の宿縁」とかんがえなおし、ついに太郎と契りを結ぶ。実際にこんなことがあったかどうかは問うところではない。しかし、貴族的な矜持が、庶民の厚顔無恥に席をゆずらねばならない時代は、現実にも、もうその辺まできていたのだ。やがてこのことが内裏に聞え、お召しがある。いまは見ちがえるばかりに立派になった太郎を引見し、非凡な歌才に驚嘆した帝が、かれの先祖をしらべさせると、かつて信濃に流された深草の天皇の皇子二位の中將こそ太郎の父であることが判明する。太郎はただちに信濃の中將に任ぜられ、甲斐信濃の国司となり、妻といっしょに故郷へ錦をかざる。

あたらしの郷の地頭、左衛門尉をば、忠深き人なればとて、甲斐信濃両国の総政所に定め給ふ。又三年養ひたる百姓にも、みな／＼所領を取らせて、わが身はつかまの郷に御所をたてて、眷属を置き、貴賤上下にかしづかれ、国の政おだやかにありしかば、仏神三宝の加護ありて、百二十年の春秋を送り、御子あまた出でて、七珍万宝に飽き満ちて、長生きの神となり給ふ。殿はおたがの大明神、女房はあさいの権現とあらはれ給ふ。

御伽草子『物くさ太郎』が、『おたがの本地物くさ太郎』とか『おたがの本地』とかいう書名でもつたえられているのは、このように物語りの結末が本地物の体裁をとっているためにはかならない。